人権感覚を高め　お互いを認め合う　人権尊重のまちづくり

人権のまど

まちづくり推進課（内線311）

インターネットと人権

その書き込み、本当に大丈夫…？

インターネットは手軽に情報収集をしたり、ＳＮＳで交流したりするなど、生活を豊かにしてくれるとても便利なツールです。その一方で、便利さを悪用したさまざまな人権課題が生じています。

ＳＮＳの普及により、誰もが自由に情報発信をすることが可能になりました。しかし、軽い気持ちでＳＮＳに投稿したイタズラ動画が瞬く間に拡散され、とりかえしのつかない事態に発展してしまったニュースをはじめ、場合によっては人権侵害などの加害者になるリスクがあります。一度ネット上に掲載された写真や情報を完全に削除することは難しく、情報発信には注意が必要です。

また、特定の人種や国籍の人を日本社会から追い出そうとする、または見下すような差別的な発言がネット上の掲示板に書き込まれることがあります。それらは「ヘイトスピーチ」と言われ、大きな社会問題となっています。

同和問題に関しても「○○（地名）は同和地区だ」など、その地域に住む人への差別を助長するような書き込みも発生しています。そのような行為は、真偽に関わらず、人の尊厳を傷つける重大な人権侵害であり、決して許容してはなりません。

インターネットは便利さと危険を兼ね備えた諸刃の剣です。一人一人がその危険性を理解し、相手を配慮した使い方を心掛けましょう。

人権相談窓口一覧
（法務省ウェブサイト）

誰一人取り残さない　安全で安心なやさしいまちを目指して

Re Start　再犯防止の情報をお届けします

まちづくり推進課（内線311）

Vol.12

犯罪をした人のその後と保護司③

犯罪に 戻らない 戻さない
～立ち直りを支える地域の力～

これまでこのコーナーでは、再犯者率が約5割を占めることや保護司による仮釈放となった者の矯正施設を出た後の支援についてお知らせしてきました。

では、再犯率が高いのはなぜでしょうか。矯正施設を出た後の支援が必要なのはなぜでしょうか―。それは矯正施設を出た後の生活環境が大きく影響しているからです。

刑期を終え満期釈放となった者の約5割は、帰る場所や住む場所がありません。再犯者の約7割は検挙された時に無職です。また、受刑者のうち高齢者の占める割合が増え、刑期の途中で認知症と診断される人数も増加しています。障がいを持つ者の割合も増加しています。

私たちは誰しも住む場所、働く場所が必要であり、また、望めば医療や福祉サービスを受けられることも必要です。しかし、一度罪を犯してしまうと日常的な生活ができず、また罪を犯した罪悪感などを抱えて社会から孤立し、本来であれば必要な医療や福祉サービスなども受けようとしなくなってしまいます。そして、やむなく再び罪を犯してしまうという負のサイクルに陥ってしまいます。

保護司は仮釈放となった者が自立し、私たちと同じ生活ができるよう、日々支援を続けています。

犯罪に戻らない、戻らせない―。それは、地域の安心安全を守るための活動でもあるのです。

更生保護ネットワーク
全国保護司連盟ホームページ

陶都のまもり

多治見警察署からのお知らせ

多治見警察署（☎㉒0110）

自分、暮らし、岐阜（まち）、「わたし」が守る。

岐阜県警察官募集

令和５年度警察官（大卒）採用試験

試験区分　　ＡⅡ（男性、女性、情報技術）
受付期限　　４月６日(木)
第１次試験　５月14日(日)
第２次試験　６月中（身体・体力検査、口述試験など）
（第１次試験合格者の方に、別途日程を通知します）
合格発表　　７月上旬（予定）
採用予定日　令和６年４月１日
採用人員　　男性 50人程度　女性 15人程度
　　情報技術 若干名

※令和４年度から警察官ＡⅡ（情報技術）の試験区分が設けられました。
※内容を変更する場合があります。詳しくは、右記２次元コード（岐阜県警察採用情報）を確認してください。



多治見警察署
先輩警察官のことば

警察官という仕事は、県民の生命・身体・財産を守る非常にやりがいのある仕事です。警察の仕事は幅広く、特技が生きることもたくさんあります。一緒に仕事ができる日を楽しみにしています。

ようこそ手話の世界へ

これまでに紹介した手話写真の動画を見ることができます。

福祉課（内線217）

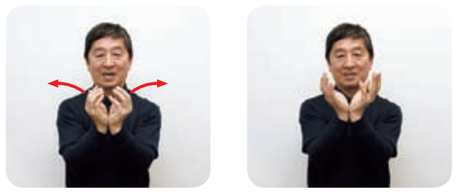
かんたん手話講座　〉　土岐市民の歌から「かざす花」

「かざす」



親指と人さし指を上につき上げる

「花」



太陽の光をあびて花が開くように

遥かなる甲子園 ～聴覚障がい者の挑戦～

昭和39年、アメリカに風疹が大流行。米軍が居住する沖縄でも猛威を振るい、罹患した妊婦から多くの障がい児が産まれ、そのほとんどが聴覚障がいでした。その子たちが高校生になった時、自分たちも野球をやりたいと学校に訴え、野球部を作って甲子園を目指した実話が後に漫画となり、映画化もされました。残念ながら甲子園は夢に終わりましたが、その題名は「遥かなる甲子園」でした。その話が現実になったと感じたのが昨年夏の甲子園です。私たち手話関係者は、特に胸を熱くして見ました。岐阜県代表校で、岐阜ろう学校出身の聴覚障がいの選手が先発投手として出たからです。結果は２回途中降板でしたが、マウンドを降りてベンチに帰った彼に監督が少し離れてマスクをはずし、口を大きく開けてアドバイスをしていた姿が印象に残りました。そう、手話が分からなくてもコミュニケーションは出来るのです。皆さんも聴覚障がい者と身振り口話で話してみてはどうでしょう。

ちなみに子どもの頃の彼を指導していた方に「どんな子でしたか？」と聞くと、「負けず嫌い」との事でした。